



『クララとお日さま』(カズオ・イシグロ)

吉田 梨紗



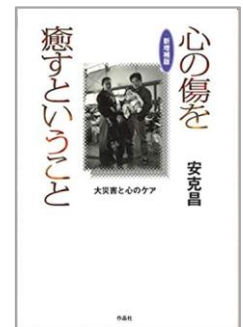
AF ロボット (人工親友) のクララと病弱な少女ジョジーとの出会いから別れまでを描いた物語。クララにとってお日さまは「神」のような存在で、ジョジーの体調がよくない時に熱心にお祈りをします。その姿はまるでクララには人間の心があるようにも見えます。純粋で献身的なクララに対し、格差社会の中を生きる人間達は冷たく、優劣だけを気にして生きています。人間にとってのクララはただのロボットにしかすぎず、物だと思っているシーンが何度かあり、胸が締め付けられます。AI化が進んだ未来は便利である反面、人間にとって大事な事を忘れてしまいそうになるデメリットもあるように思います。心や愛、家族について今一度考えさせられる一冊です。

(早川書房)

『心の傷を癒すということ』(安克昌)

原 真由美

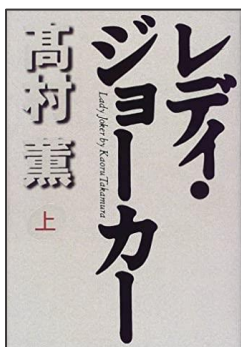
心のケアの必要性は阪神淡路大震災 (1995 年) を機に高まりました。当時自らも被災しながら全国から集まった精神科医と共に仮設住宅を積極的に訪問し、PTSD に苦しむ被災者に寄り添い続けた精神科医・安克昌さんが残した人々の心の記録です。被災者との会話から見えた心の叫びは、地震の衝撃に加えて、火災や災害死の目撃などが複合され単純ではありませんでした。心の傷は安全な環境で信頼できる相手にだけ時間をかけて語られます。安さんたちはその場所を作り、復旧とともに刻々と変化するニーズを捉え続けました。心の傷を負いながらも回復に向けて懸命に生きる人を、敬意をもって受け入れる社会が作られることが心のケアの重大な意義であると語っています。精力的に活動をした安さんは志半ば病のため 39 歳でこの世を去りました。



(作品社)

『レディ・ジョーカー』(高村薫)

大久保美玲



物井 (孫が部落差別で就職に失敗し事故死。それを受けて義理の息子も自死。)、ようちゃん (溶接工。事故で指を失う。)、半田 (刑事)、高 (信用金庫職員)、布川 (トラック運転手。知的障害の娘を持つ。) の 5 人。共通するのは世の中に恨みを持つ競馬仲間ということだけ。その 5 人がそれぞれの力を活かし、レディー・ジョーカーという犯罪グループを結成します。日の出ビールの社長城山を誘拐し、裏取引の末に 20 億円を手に入れ、計画は見事に成功します。しかし、それに便乗した有象無象の悪人が模倣犯としてビール業界から金をせしめる事件が発生し、5 人は次第に窮地に追い込まれていきます。上下巻それぞれ 2 段組と非常にボリュームある内容ですが、中だるみしない高村薫さんの筆力により、読み終えるのが惜しいくらい、あっという間に物語の世界に引き込まれます。お正月休みのような時間がある時にゆっくりと楽しめる作品です。(毎日新聞社)